

日本における実証的宗教心理学的研究の過去・現在・未来

東京大学大学院総合文化研究科 助教
松島公望 (まつしま こうぼう)



Profile — 松島公望

2007年、東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科博士課程修了。2008年より現職。博士（教育学）。専門は発達心理学，教育心理学，宗教心理学。著書は『宗教性の発達心理学』（単著，ナカニシヤ出版），『宗教心理学概論』（共編著，ナカニシヤ出版）など。

実は長い歴史をもつ「科学としての宗教心理学」

宗教心理学は，欧米（特にアメリカ），日本共に科学的心理学のスタートとほぼ同じ，19世紀末から20世紀初めに研究が始まっており，心理学の中では長い歴史をもっている。

「科学としての宗教心理学」（実証的宗教心理学的研究）の始まりは，1899年に刊行されたスターバックによる *Psychology of Religion* であり，世界で初めて質問紙法による青年の宗教性研究を行ったのである。ほぼ時を同じくして，日本における宗教心理学は，1900年の元良勇次郎らによる論文「日本現時學生の宗教心に関する調査の報告」から始まった。1899年にスターバックが欧米で研究を行った1年後に，日本でも研究が行われていたのである。

この時期の特徴としては，日米共に心理学界において中心的な立場にいた人物が宗教心理学に深く関わっていたことが挙げられる。アメリカでは，アメリカで最初の心理学実験室を作ったといわれるジェイムズとアメリカ心理学会（APA）初代会長であるホールであり，両者は宗教心理学に強い関心を示していたことで知られている。先述のスターバックは，ジェイムズ，ホールの両方から師事を受けている。また，ジェイムズについては，日本でも永く読み継がれているその著書『宗教的経験の諸相』からもうかがい知ることができるであろう。

日本では，国内で最初に宗教性研究を行った元良勇次郎こそが日本で最初の心理学者の一人であり，日本の心理学界に多大な影響を与えた人物である。また，元良の弟子であり，やはり

当時の心理学界の中心人物であった松本亦太郎もこの分野に強い関心を示し，大きな役割を果たしていた。

このように，日米共に当時の宗教心理学は，中心的な立場の人物のもと，心理学界において主流の地位にあったわけである。ちなみに1912年に刊行された日本で最初の心理学学術誌である『心理研究』において，刊行の2年後の1914年に「宗教心理號」と宗教心理学に関する特集が組まれている。このような取り組みからも，この当時の日本における宗教心理学の地位や関心の高さをうかがい知ることができるのである。

しかし，この当時からおよそ100年，現在の日本では，宗教心理学は決して馴染みのある分野ではなく，ほとんど見たことがないと感じている人が多いように思われる。実際，主流の地位は長く続かず，その後，細々と研究が行われて，現在に至るわけである。

そのような状況ではあったが，近年，実証的宗教心理学的研究への関心が高まってきている。また，心理学以外の宗教学，哲学，仏教学といった実証的研究とは離れた研究分野からの関心も高まっている。このような関心の高まりの背景には，現代の混迷した社会状況を反映して，改めて宗教を科学的に捉えようとの気運が高まっているからかもしれない。

そこで本稿では，まず日本における実証的宗教心理学的研究（科学としての宗教心理学）のこれまでの歩みとその特徴，さらに近年の動向について論じることとする。そのうえで，この

分野における可能性について検討してみたいと考えている。スターバック、元良らが実施した最初の調査研究の後も、日米共に実証的宗教心理学的研究において質問紙法による調査研究（宗教意識調査）がその主流を占めている。その実状を踏まえて、日本における質問紙法による調査研究について論じてみたい。

実証的宗教心理学的研究

— これまでの歩みとその特徴

日本における実証的宗教心理学的研究を概観すると、明治～昭和初期（戦前）までは、児童、青年を対象とした研究、戦後～現在に至るまでは、青年を対象とした研究が主だったものであった。

明治～昭和初期（戦前）までの研究の傾向は、『心理研究』からもうかがい知ることができる。まず、『心理研究』創刊号において、石神徳門による論文「青年の宗教心」が1912年に掲載され、その後も、堺栄之介による論文「児童宗教心発達の研究」が1922～23年に掲載されるなど、数は多くはないが、節々で、児童、青年を対象とした宗教意識調査が行われ、発表されていた。

戦後～現在に至るまでの研究を「対象別」に分類すると、大きく三つに分類することができる。一つめは、主に宗教系学校を対象とし、宗教教育との関連から検討したものがあつた。二つめは、特定の宗教を対象とし、その信者の宗教意識を中心に検討したものである。三つめは、特定の宗教を対象とはせず日本人一般の宗教意識を検討したものである。

そして、青年を対象にした研究が一貫して中心をなしてきたことは、「回心」「入信」「宗教的覚醒」といった体験によって個人の宗教性が大きく変化する時期であるという青年期特有の特徴が研究者の注目を集めてきたことを示している。明治～昭和初期では、児童を対象にした研究も主として行われてきたが、これもこの時期にみられる「宗教性の萌芽＝宗教に目覚める」との側面に研究者の関心が集まったからではないかと考えられる。すなわち、日本における実証的宗教心理学的研究では、主に「宗教に対する気づき・認識（覚醒、目覚め）」に焦点を当

てて検討されてきたということがその特徴として挙げられるのである。

近年の動向 — スピリチュアリティへの注目

近年、スピリチュアリティとの言葉を見聞きすることが少なくない。日本における研究・実践の場を見渡してみても、宗教学、宗教社会学、教育学、老年学、看護、介護、医療、社会福祉の領域、さらにはマーケティングの領域でも幅広く論じられている。その中でも実証的研究では、老年学、看護、介護、医療、社会福祉の領域で行われていることが多い。その理由はいくつか考えられるが、主だった理由として、1990年代にWHOにおいて、「健康の定義」を含めスピリチュアリティについて様々な議論がなされたことが大きいように思われる。

このような経緯から研究が始まったことから、実証的なスピリチュアリティ研究の特徴は、「健康」（身体的健康、精神的健康）や、宗教的ケアやスピリチュアルケアとの言葉があるように「ケア」に着目した形で展開しており、研究対象も「高齢者」であることが多い。研究数も1990年代以降、現在に至るまで目にするものが多くなっている。

日本における実証的宗教心理学的研究は、これまで「青年」が中心であったことから、「高齢者」を対象とした研究の広がりは新たな可能性を感じさせる。少子高齢社会が抱えている課題を考えると、今後さらに「健康」や「ケア」に対するニーズが高まることが予想され、それと連動する形で実証的なスピリチュアリティ研究も増加する可能性は高いと考えられる。

実証的宗教心理学的研究の可能性(未来)を探る

日本における実証的宗教心理学的研究は、上記の通り、いくつもの研究がなされてきたが、これらの知見はほとんど知られることなく、現在に至っている。実際、この分野の研究、論文などほとんど見たことがないと多くの読者が感じているだろう。というのも、これまでの研究は大学紀要や宗教団体の機関誌に掲載されていることが多く、また、研究間での議論や交流は

ほとんど行われてこなかった。そのため、これらの知見が継承されないまま埋もれてしまうという悪循環を繰り返していたのである。

これは宗教系学校でよくみられたのだが、宗教系学校の調査は、自校の生徒、学生の宗教性を把握するためのものが多く、それらが把握されれば、研究は完了してしまう。調査結果も自校の紀要に掲載する場合が多く、他に広く伝えることはほぼ皆無である。各学校における実態調査の観点からは調査の目的が達成されたとしても、実証的宗教心理学的研究の観点からはせっかくなかき生み出された一つひとつの知見はほとんど継承されることなく、現在に至ってしまったということになるわけである。

さらに、この宗教系学校の「自校の実態調査」というスタイルは、測定法にも反映されていた。宗教系学校の論文では、独自で調査票を作成し、結果も単純集計を中心としたものが多い。調査票作成（尺度開発）の段階から綿密に測定法を検討し、それをもとに詳細な分析を行えば調査結果の有効性はさらに高まったのではないかとと思われる場合も少なくなかったのである。

そして、残念ながら、この測定法の問題は実証的宗教心理学的研究全般にいえることでもあり、とりわけ尺度開発に際して丹念に検討した研究がほとんど見当たらないというのが、この

分野の現状なのである。これまでこの分野において研究間での議論や交流はほとんど行われてこなかったことがこのような現状を生み出したと考えられる。過去の反省を活かし、今後、実証的宗教心理学的研究が展開していくためにはどのようなことを考慮すればよいのか。「測定法を精練させること」「協働すること」の二つを提案したい。

①測定法を精練させること 今後、実証的宗教心理学的研究を展開させるためには、調査のベースとなる尺度を含め、測定法を丹念に検討する必要があるように思われる。改めて宗教を科学的に捉えようとの気運が高まっていると記したが、その実行に際して、測定法を精練させる作業は欠くことができないであろう。

この作業を行うにあたって、ヒルによる「宗教およびスピリチュアリティの測定を評価するための一般的な評定基準」(Hill, 2005)が参考になる(下表)。欧米の研究は、1999年に*Measures of Religiosity* (Hill & Hood, 1999)という宗教性の測定尺度集が刊行されるほどこの分野の研究は進んでおり、日本の研究者は、欧米の知見から多くのものを学ぶことができる。ただし、宗教/スピリチュアリティは、国、地域や文化(宗教的風土)に大きく依存している場合が多いことから、この点については注意が必要であ

表 宗教およびスピリチュアリティ測定のための一般的な評定基準

基準	評定の基準			
	模範的 (評点=3)	良 (2)	許容可能 (1)	最小限の許容可能および評定外 (0)
理論的な根拠	明確に確立した(あるいは最も有力な)理論的枠組みに基づく	明らかに妥当と思われるが、必ずしも総意による理論的枠組みには基づかない	理論に対して一部分だけうまくつながっている	理論は提示されているが、有力な理論との結びつきは不明瞭であり、その理論は疑わしい; 理論は議論されていない
サンプルの代表性/一般化	明らかに広範囲を想定した母集団を代表しており、ある宗教的伝統や限られたスピリチュアリティによって制限されていない	あまり広範囲を想定していない母集団(例: クリスマス全般、治療中の人など)	狭義な母集団(例: 福音主義、モルモン教)、あるいは、比較的広い母集団の中であまり明確に代表性が提示されていない	単一の調査の限定されたサンプル; 明らかに代表性のないサンプルまたは母集団が定義されていない
信頼性 (α係数、あるいは最低2週間の再検査)	2つないしそれ以上の調査にわたって非常に優れている ($r > .80$)	2つないしそれ以上の調査にわたって良 ($r = .70$ to $.80$)	1つの調査において、非常に優れている ($r > .80$) あるいは良 ($r = .70$ to $.80$); 2つないしそれ以上の調査において中程度 ($r = .60$ to $.70$)	単一調査において中程度 ($r = .60$ to $.70$) または低い ($r < .60$); 信頼性の報告がない
妥当性	少なくとも2つのタイプの妥当性について異なる調査から多様な(種々の)サンプルにわたって高い有意な相関がある	少なくとも2つのタイプの妥当性について(単一の調査、あるいは、多数の調査から)多様なサンプルにわたって有意な相関がある	単一のサンプルに対して少なくとも2つのタイプの妥当性、あるいは、多数のサンプルに対して1つのタイプの妥当性について有意な相関がある	単一のサンプルに対して1つだけ測定した妥当性について有意な相関がある; 有意な相関がない

Hill (2005) を筆者が翻訳。

るが、そのことを考慮しながら検討すれば有用性は高い。

たとえば、「サンプルの代表性／一般化」の箇所をみるとよくわかるが、その母集団となる対象はまさに欧米のユダヤ・キリスト教文脈に依拠しており、これを日本人にそのまま適用することはできない。対象となる母集団に、「クリスチャン全般」「福音主義」「モルモン教」等が記載されているが、日本ではこれらの対象を母集団として想定するのが難しいのは明らかである。しかし、この評定基準から日本人の宗教性／スピリチュアリティを測定するヒントを得ることはできる。すなわち、評定基準を通して、「日本の宗教的風土を踏まえて、対象となる母集団をどのように設定することが適切であるのか」といった問題を日本の実証的宗教心理学的研究ではほとんど検討してこなかったことが見えてくるのである。

この母集団の問題を含め、測定法から日本人の宗教性／スピリチュアリティを検討するとの視点はこれまでほとんどなかったように思われる。宗教を科学的に捉えるのであれば、これらの作業は避けて通ることができないであろう。実証的宗教心理学的研究における測定法を精練させることができれば、各調査で示されるエビデンスがより強固なものになり、その結果、今まで以上に社会や学問領域への貢献度が増すことになる。それこそが、この分野の新たな可能性（未来）を広げる第一歩だと考えるのである。

②協働すること 最後に「協働すること」の意義を強く訴えたい。それは、「研究間での議論や交流はほとんど行われず、これまで生み出された知見が継承されないまま埋もれてしまうという悪循環を繰り返していた」ことへの強い反省があるからである。幸い、この働きは以前より始まっている。その大きな流れとして、2003年7月に宗教心理学研究会が発足した。2012年で発足10年目を迎え、心理学、社会学、宗教学、哲学、神学、仏教学、看護学、老年学など様々な分野の研究者、大学院生が集い、学際的な交流を行っている。

研究会有志による成果も徐々に現れている。

2011年にわが国では約60年ぶりとなる科学的心理学に基づく概論書『宗教心理学概論』（金児, 2011）が刊行された。また、「宗教心理学の体系化に関する研究：宗教心理学の社会的貢献にむけて」（2005年度科学研究費補助金 基盤研究（C）研究代表者：西脇良 課題番号：17633006）、さらには、「宗教性／スピリチュアリティと精神的健康の関連：苦難への対処に関する実証的研究」（2012年度科学研究費補助金 基盤研究（B）研究代表者：松島公望 課題番号：24330185）とのプロジェクトが生まれ、これまでにない協働の作業が行われている。このように、実証的宗教心理学的研究の新たな可能性が展開しつつある。しかし、これらはまだ緒に就いたばかりであり、かつ今後さらなる協働が求められているようにも感じている。

それは、2011年3月11日に未曾有の大震災を経験し、これまで以上に日本人の精神性が問われるようになったことに由来する。精神性の中には必然的に宗教性／スピリチュアリティも含まれることから、今後さらにこの領域への関心が高まるであろう。これらの問題を扱うのはたやすいことではなく、多くの困難が伴う。だからこそ、さらなる協働が必要となると考えるのである。しかし、この問題に真正面から取り組むことができるならば、実証的宗教心理学的研究といった枠を超え、われわれ日本人にとっての未来、可能性が広がっていくと考えずにはいられないのである。

文 献

- Hill, P. C. (2005) Measurement in the psychology of religion and spirituality: Current status and evaluation. In R. F. Paloutzian & C. L. Park (Eds.), *Handbook of the psychology and spirituality*. pp.43-61. New York: Guilford Press.
- Hill, P. C. & Hood, R. W. Jr. (1999) *Measures of religiosity*. Birmingham, AL: Religious Education Press.
- 金児暁嗣（監修）松島公望・河野由美・杉山幸子・西脇良（編）（2011）『宗教心理学概論』ナカニシヤ出版